学校図書館 Take Off!

No.11

八王子に学校図書館を育てる会

八王子に学校図書館を育てる会広報紙
二〇一二年九月三十日発行　第十一号

本年九月から試行的に、八王子市内の小中学校図書館へ、司書あるいは司書教諭の資格を持つ方が「読書推進担当サポーター」として派遣されています。一昨年に学校図書館サポート事業として、市内の学校図書館に関わる先生方やボランティアへの支援が始まりました。昨年からはは蔵書のデータベース化という取り組みも進められています。本会が活動を始めて十年となりますが、これら一連の学校図書館充実への施策は、私たちの活動が評価されてきたという証ではないかと感じています。

折しも、文部科学省が平成二十四～二十八年の「学校図書館環境整備五カ年計画」として学校司書配置のための地方交付税措置をとり、また「学校司書法制化」という動きも国会の中で始まっているそうです。東京都内でも司書配置の進まなかった八王子ですが、その波は確実に押し寄せているのでしょう。

今年春に、学校図書館への人の配置を願う団体が新たに生まれました。八王子市議会へ「市内の全小中学校へ専門 専任 正規の学校司書の配置を求める」請願書と署名を提出するなど、人の輪が広がっていることもうれしい動きです。一人でも多くの方が、子どもたちの生きる力を育む学校図書館の実現に力を出し合って下さることを願っています。

平成24年度第3回子どもゆめ基金助成事業

『本が並んだ、その先は？』

去る九月二日（日）、中央図書館会議室にて、「本が並んだ、その先は？」と題して、国士舘大学二一世紀アジア学部准教授　桑田てるみ氏に講演をしていただいた。「二一世紀アジア学部」といういささかユニークな名称の学部はグローバルな学生を育成しているという紹介ののち、講演のキーワードは「グローバル化」であるというお話から始まった。

続いて、桑田先生からの質問。「スマフォを持っている人はどのくらいいますか？」…数十名の参加者中手が挙がったのはパラッ。会場はすでにＩＴ革命によるグローバル化の波に乗り遅れている人間ばかり（？）でさすがに先生も苦笑い…。「これからの社会で生きていけなくなりますよ。」とおっしゃりつつ、現代は「知識基盤社会」（中教審）であり、

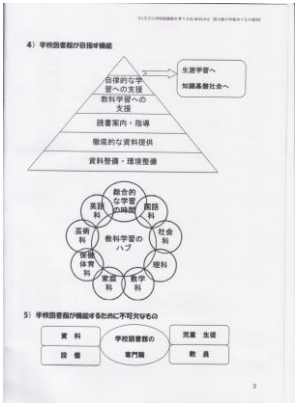
「知識には国境がなく、グローバル化が一層進む。」と解説していただく。ゆえに、学校教育が目指すのは「グローバル化の浸透に対応できる子どもたちの育成」であるが、学校図書館も「グローバル化」を目指してほしいという、「本が並んだ、その先は？」の答えが明示された。

さて、「手を動かさないと眠くなりますから」と、「学校図書館って何だろう」というテーマのワークショップに移行。まずは、個人で「学校図書館」についてマッピング。次に、グループで「公共図書館と学校図書館」を比較対照した。付箋や台紙、ペンを使い、ベン図で２つの図書館の類似点と相違点を整理、班ごとに発表したことで、学校図書館（特に八王子市の学校図書館の現状）の特徴が浮き彫りになった。それは、公共図書館と異なり、学校図書館には「（グローバル化を意識した）学校教育を支える機能」が不可欠だということである。また、この

グループワークは、個々の知識格差を縮め共有化するグローバル化の手法の体験でもあった。（詳しくは『中学生・高校生のための探究学習スキルワーク―6プロセスで学ぶ』桑田てるみ編著、参照。）

そして、すっかり目も覚め、外国の優れた学校図書館の写真を見せていただきながら、学校図書館が目指す段階的機能（五段階のピラミッド構造）についてお話しいただいた。八王子市はやっと一段目（資料整備・環境整備）にあるようで、二段目（徹底的な資料提供）に登るには図書館に専門職または常駐者が必要であるということ、最後に「学校図書館の発展のカギは専門職にあり」という言葉をいただいた。一層の勉強の必要性を感じた三時間だった。

（愛甲　尚美　記）



桑田てるみさんの本
『鍛えよう！読むチカラ』
学校図書館で育てる25の方法
明治書院

本と生徒を結びつける読書指導は、経験がモノをいう職人技であるものの、学校図書館は一人職場がほとんどであり、優れた実践を学ぶ場に乏しい。そこで本書は、ベテラン学校図書館員=本をすすめるプロが、どのように考え、どんな工夫をして、子どもたちに本を手渡しているのか、その実践にいたるまでの「頭の中」を図解。読書指導の現場で培われた、とっておきの技が学べる一冊。

（明治書院「内容説明」より転載）

子どもゆめ基金助成事業『子どもの本、もっと』
学校図書館井戸端会議　どんなことが気になりますか
平成二四年六月二一日（木）午前一〇時～一二時
北野市民センター七階カルチャールーム

1．ビデオ上映
「図書館を生かす　学校は変わる」
山形県鶴岡市立朝暘第一小学校

山形県鶴岡市立朝暘第一小学校では、学校経営の中核に学校図書館が据えられています。二〇〇三年度にはその実践が評価され、第三三回学校図書館賞大賞（全国学校図書館協議会主催）を受賞されました。井戸端会議を始める前に、学校司書（注1）・司書教諭（注2）・学級担任が連携して図書館活用教育を推進している朝暘第一小学校の様子を映したビデオを鑑賞しました。

注1：「学校司書」とは、学校図書館の仕事に主として従事している職員の総称。
注2：「司書教諭」とは、学校図書館法の規定に基づいて設けられる職。教諭として発令されていることが前提。十二学級以上の学校には配置が義務付けられたが、充て職発令である。
《引用・参考文献：図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房　二〇〇四年》

2．井戸端会議

当日の参加者は二六名。ビデオ鑑賞でリラックスすることができ、日頃抱えている「分からないこと」「悩んでいること」を出していただくことから始めました。皆さんが「明日から取り組んでみよう」という前向きな気持ちになれる話し合いを目指しました。（質問も、それに対する回答やアドバイスも参加者同士で行われたものです。学校図書館活用重点校の図書ボランティアの方もいらっしゃいました。）

Q中学生になると図書の時間が無くなり、図書館から身体も心も離れていくように感じます。中学生を図書館に呼び込む方法が何かありませんか。

・子どもの通る入り口付近に「今日は開館しています」「こんな本が入りました」という看板を作って呼び込むという取り組みを始めるところです。そして先生には、「月火木金の放課後、午後三時五〇分～四時二〇分、図書館は利用できます」というお知らせをしてもらうことにしました。学校の協力が不可欠だと思います。

Q小学校でも図書館に来る子は少ないです。良い方法はないですか。

・先生に課題を出してもらうのが一番だと思います。
・サポートセンターに相談されるが良いです。

Q学校図書館サポートセンターにはいろいろな相談を持ち込めるのですか。

・個人ではなく、学校を通して問い合わせができます。まず、質問事項を紙に記入し、それを司書教諭に渡し、目を通してもらいました。そして、司書教諭からファックスしてもらうと数日でサポートセンターから回答が届きました。場合によっては、学校を訪問してくれます。質問は、サポート事業の重点校でなくてもできるそうです。

Qボランティア制度ができて二年目の学校です。積極的だった図書担当の先生（司書教諭）が転勤されてしまいました。後任の先生とどのようにコミュニケーションを取ったらよいのかわかりません。お知恵をお貸しください。

・八王子市には多忙な先生とボランティアを繋ぐ「コーディネーター」が各学校にいます。この制度ができて五年目になります。もし居ないようでしたら、副校長先生がコーディネーターの役割を担っているはずです。コーディネーターがうまく機能している学校は、コミュニケーションが取れていると思います。

・活動の記録ノートを用意して、先生方と連絡を取るようにしています。連絡事項を書き込み、お互いの返答をやり取りしています。

Q本の廃棄についてお聞きしたいです。

・本は学校の財産として登録されているので、勝手には捨てられないそうです。

・本校では、廃棄したい本を選んで並べ、それを先生方にお見せします。つまり廃棄する本は、先生に決めてもらいます。捨てると決まった本は、学校公開時に展示し、自由に持ち帰ってもらうことにしました。残った本を廃棄する予定です。この方法は、サポーターさんに教えてもらいました。たいへん有り難いアドバイスでした。

・相当古い本にバーコードが貼られていることがあります。これは、蔵書冊数保持のためかもしれません。この場合、廃棄は管理が落ち着くまで待った方が良いようです。

・我が校でも非常に古い本にバーコードが貼られています。サポーターさんに相談したところ、学校の財産として登録されている本なので必要な手続きがあるそうです。それをしないままで無くなるのは困るということで、デジタルカメラで番号だけ撮影して、本は別にしています。

その他、今感じていること

・今年度やっと重点校になれました。しかし、ボランティアが成り立っていません。現在二人です。学校が何を求めているのか分からないと、こちらは動けません。

学校図書館を良くしたいという思いに溢れた、熱いトークが繰り広げられました。「ボランティアも希望を持って、出来ることから諦めずに活動していこう」ということを確認して、散会しました。

朝の読み聞かせは、十分～十五分の限られた時間なので教室に入ったらすぐに読み始めたいところですが、子どもたちのその日の様子や雰囲気をつかむためにおすすめなのがこの本です。

『版画のはらうた』（くどうなおことのはらみんな／保手浜孝画　童話屋）は、野原にいる虫や草や花たちの声を工藤さんが書き留めた詩集です。季節に合わせた一篇を紹介してから本を読みます。出会いの時には「へびいちのすけくんの『あいさつ』」で元気ぴんぴんに、夏は、子どもたちの大好きな「かぶとてつおくんの『けっしん』」を、秋のお月見の頃には「つきとしこさんの『よるのそら』」を紹介します。詩を読み一呼吸入れることで教室の空気がすうっとまとまってくるのが感じられます。

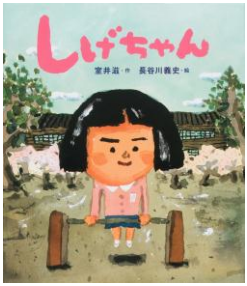
三年生で一年間読んでいた時に、「もうすぐ冬なので野原のみんなも冬支度みたい」と言って『のはらうた』を最後にしたら「そうか…」と納得してくれたのがなんとも楽しい思い出です。

（桑原　由美　記）

（表紙画像の掲載は出版者の許諾を得ました）

「教室での読みきかせ」会員のおすすめ絵本

「しげちゃん」
室井滋作・長谷川義史絵
金の星社



作者は女優の室井滋さん。「滋」は本名なのだそうです。小学校に入学したしげちゃん。入学早々、嫌な事が起こります。机の上に名前が書いてあります。男の子は水色、女の子はピンクの紙。しげちゃんは女の子なのに水色の紙に「しげる」と書いてありました。しげちゃんは男の子みたいな名前のせいでしょっちゅう嫌な目に合います。お母さんに「もっとかわいい名前にかえて」と訴えます。するとお母さんは…。

うちの娘も男の子に多い名前です。「男の子みたい、変な名前。」とからかわれて、「どうして女の子らしい名前にしてくれなかったの？」と泣かれた事があります。その時、絵本の中のお母さんのように、名前に込めた親の思いを伝えました。どの名前も親が懸命に考え、思いをこめた名前です。言われた子の気持ちを想像する、それができればいじめは起きません。一人一人が尊重されるクラスであって欲しいと願います。

（中崎　厚子　記）

うちの子が中学生の時だから四十年ほど前のことである。息子が中学校の読書感想文を見せてくれた。そこに夏目漱石『坊ちゃん』の読後感があった。「自分の気持のままに突っ走ると損をするという教訓」という総括だった。同じような年頃に読んで以来、この主人公を肯定的に受け取っていた私はアッと驚いた。そうか、そういう読み方もあるのか。たしかにそれには一理がある。ある作品から同じ価値観が生れるとは限らないのだから、自分の好きな作品を押しつけがちの私にはいい薬だった。

それ以後、三十人の子どもがいれば三十通りの受止め方があって当然と思うようになった。学校ではそれを指導して全員をある水準に導く必要があるだろうから、先生の仕事はたいへんなことだ。ボランティアで本を読む人はそこまで考えなくていいし、読解力や道徳観念の注入まで気にする必要はない。先生に比べれば気楽なものだ。ただし、子どもたちと付き合うとは単にある時間を共有すれば済むことではない。三十人の子がいて三十通りの人生観があるとすれば、それぞれの気持の奥にあるものを感知する必要がある。教師ではない立場の人は、教師以上にそのことへの真剣さが求められているのではないだろうか。

読書感想・学校・いじめ・ボランティア

——志々目　彰——

世の中で「いじめ」が問題になっている。根は深いし状況は複雑だから、単純な評論は出来ない。しかし、例えば三十通りの子どもの表情を公平に見渡せる人がいるならば、打つ手がないということはなくなると思う。大人は目から鼻へ抜けるような聡明な子に頼りがちだから、いつも無表情に見える子がその子なりの感動や葛藤とどのように向き合っているか、気付かないことがあるのではないか。だが継続的に読み聞かせを続けていると、それを感得する瞬間がある。

ここでは具体的な経験談は遠慮するが、私は何度もそういう思いをした。点数主体の学校の評価では、表面に現れないかもしれない地味な子の悲しさや優しさも見た。教師でない人が学校に入ることのよさは、そういう視点から子どもたちを見守ることが出来るということにあると思う。ボランティアには出来ることと立ち入ってはいけないことの限界があるから、なおのこと哀しい子たちの蔭ながらの応援団になってほしい。子どもに本を読むうちに磨かれる大人の学びとはそういうものだろうと思う。

教育長へ要望書を提出

八月二十四日、八王子市教育委員会教育長、坂倉仁氏に、要望書を提出してきました。毎年提出していますが、今回は新しく就任された教育長へ初めて提出するものです。同時に、市議会議員へも手渡せるよう、議会事務局にも議員分預けておきました。さて今回の要望書の項目です、

一．平成二十三年度の要望書回答について、
　その後の取り組みをおたずねします。
二．「読書のまち八王子推進計画」3年目の
　取り組み状況をお尋ねします
三．市内全校への学校司書の配置をお願いします。
四．学校図書館サポート事業のさらなる充実を。
五．私たちが願う学校図書館のありかた。

坂倉氏は、以前、八王子中央図書館長や、学校教育部長等を歴任されており、今までの図書館行政のこと、学校図書館への施策など、詳しく話されました。今回私たちが一番尋ねたいこと、学校図書館のサポート事業と全校への学校図書館司書配置については、教育長ご自身の願いでもあると確認することができました。

今回9月から新しく行われる、市内6つの中学ブロックに一名ずつ派遣サポーターを置き、そのサポート事業を推進させること、そして将来的には全校に学校司書を置くことが理想であるということを話されておられました。

また、各校校長や司書教諭への研修の場の設定や、ボランティアの研修に関わることも、さらに推進していきたいとの思いを持っておられる事も話されていました。

私たちの育てる会が、学校図書館のより良い発展の為であるなら協力を惜しまないことも話しながら、要望書の解答を急いでいただけることを願い、三〇分の面談を終えました。

（要望書提出の為に面談したのは、本会代表の篠原と宮本の二名）

［宮本　茂　記］

他市で頑張る会員の活動報告

『奥多摩町立氷川小学校の図書支援員となって』

二〇一二、九、一一　島崎　滋

七月末より、奥多摩町立氷川小学校「図書支援員」という職に就かせていただきました。奥多摩町教育委員会の臨時職員ということで、任期は年度末までです。

まず始めに、校長、司書教諭のお考えをうかがった後に、「図書支援員の取り組みの方針」（下記）を提示させていただきました。

《図書支援員の取り組みの方針》（一部）

期待されている役割

●言語能力向上をめざした読書指導の推進

①　学校図書館の整備

②　読書活動の活性化

●そのための改善策

※①～③は省略

④書架を移動し、別置コーナーを作りたい

⑤平置きできる展示スペースを作りたい

⑥内装と外装を一新して、図書室の存在感を高めたい

⑦昇降口・廊下・掲示板・窓などに情報を発信したい

⑧「図書新聞」を発行したい

設備を整え→子どもたちの関心を高め→利用者を増やし→図書委員にやる気を出させ→子どもたちにも図書室づくりに参加させ→教師・用務主事等の協力を頼み→保護者の関心も呼び→図書ボランティアの助けも仰ぎ→読書の推進→授業での図書館活用→学校になくてはならない場所へ・・・・・というような流れを作っていきたいと思っています。

●経過と今後の取り組み

夏休み中に、用務主事さんのご協力を得て、書棚を明るい色に塗りかえていただきました。本の並び替えも済み、新学期を迎え「図書新聞」の発行・「読み聞かせ会」などを準備しています。

Before（校長への説明）

After
（ファンタジー・ホラーコーナー）

『司書教諭から司書へ』

（多摩市立連光寺小学校　司書）大島　真理子

「先生、ルルとララの本は、どんな題がありますか？」「先生、予約したグレッグのダメ日記はまだ順番が回ってきませんか？」休み時間や図書の時間には、本の返却、貸し出しだけではなくこういった質問や要望が司書の私のところに寄せられます。休み時間には学年を問わず図書室にやってきて、当たり前のように静かに本を読んでいます。そして、チャイムが鳴ると大慌てで教室に戻っていきます。校長先生もよく図書室に来て、本を手にとってくださいます。

私はこの四月から多摩市の小学校図書館の司書（臨時職員）として働き始めましたが、このような学校図書館の様子に大変驚きました。なぜなら、以前の小学校ではこういう様子は残念ながら見られませんでした。実は私は一年半前まで八王子市の小学校に勤務し、司書教諭をしていました。図書室に司書はおらず、担任が図書の時間に返却貸し出しを行い、司書教諭の私は休み時間に一階の教室から四階の図書室まで行くことは、一週間に数えるほどでした。読書環境のみならず、何よりの違いは児童の読書活動です。読書指導については自分の学年はある程度深めることはできても、全学年に同じように浸透させ、学校全体として同じ土俵にのって読書活動を活性化させていくのは困難であることが悩みでした。校内研究に読書指導や図書館活用が取り上げられれば別ですが。

司書になってみると「図書室にいつも司書がいる」ことの重要性を強く感じます。司書がいることにより、左記のような取り組みが充実し、向上し、児童生徒の読書活動を一層推進させることができると考えます。

① 読書環境整備
② 児童の読書相談
③ 児童教師の貸し出し冊数増加（今年度の一学期の児童一人あたりの貸し出し冊数は２４．３冊）
④ 全児童への「読書ノート」配布（前任司書が作成）
⑤ 本の予約受付表（児童用）とその連絡
⑥ 読書週間の充実した取り組み
⑦ 図書委員会児童との交流や活動
⑧ 全クラスに対しての読み聞かせや本の紹介の充実
⑨ 児童の読書に対する興味関心意欲の高さ（本はともだち）
⑩ 市図書館との連携による集団貸し出し（９月まで３００冊借り入れ。２年生の国語科と生活科４年生の国語科と総合５年生の総合）
⑪ 図書ボランティアや保護者・地域の方々との連携
⑫ 全校児童の読書傾向の分析と今後の課題検討

八王子市に一日も早く司書が配置されることを願ってやみません。

『子どもたちに本の力を』

（奥多摩町立氷川中学校司書）田沼恵美子

日野市公立学校図書館で学校司書をしてきました。本の倉庫だった中学校図書館で、子どもたちが手に取りやすい書架の配置を考え、子どもたちの居場所となる空間作り、別置配架、図書便り、テーマ配架、授業とのコラボの中での資料提供、ブックトークと積み上げてきた十三年間でした。その日野の制度が有償ボランティア制度になったときは本当に残念で悔しかったです。生徒との関係ができていて、最後の勤務校にボランティアとして残ろうと真剣に考えました。でも一校に一名の学校司書がはりついての十三年でしたので、応募者全員を採用するという条件で諦めました。

その後お茶の水女子大付属中学校図書館司書を五年（国立学校法人も学校司書は不安定採用で臨時職員）の後に親の介護が始まり、毎日の勤務が無理になり、東京学芸大附属特別支援学校の図書スペース創りや杉並区の中学校図書館に関わり、現在は奥多摩町立氷川中学校図書館で学校司書をしています。毎日の勤務ができないので、私と若い司書資格取得中の方と二人で日を分け持っています。

氷川中図書館に初めて入ったとき、何か違和感があり、ん！？と思ったのですが、何と分類配架が右から左！！　眩暈がしそうでした。業者が配架したとのことで、先生方に一所懸命に今後生徒たちが使う公立図書館や、高校、大学の図書館はすべて左からの配架であることを説明して、ご理解を得、生徒のボランティアを募って、図書館大改造をまず行いました。なんと生徒の三分の二が集まってくれ、汗を流して本の大移動を行いました。そして季節ごとの展示を図書委員と行い、シリーズで抜け落ちている本や生徒や教員のリクエストの購入、予約制度を始め、夏休み中の貸出も行いました。新着図書が入る前から、配架が変わり、テーマ展示配置のある図書館に、生徒はこんな本があったのかと借りにきました。今は新着図書が入り、よく借りられています。

今後はもっと生徒の希望を取り入れることと共に、授業支援を最大目標にしたいです。図書の先生と綿密な連携をとり、ほかの先生方とも繋がって、読書の個の喜びと学習の知る喜びを応援できる図書館作りをめざしています。そして、若い仲間が氷川中司書としてはりついて仕事ができる環境作りをして退きたいと思っています。

これからの活動

子どもゆめ基金助成事業　第三回

『子どもの本、もっと』　広瀬恒子さん

日時　十月二十六日（金）
　　十時～十二時半
会場　八王子市中央図書館

八王子に学校図書館を育てる会　十周年記念講演会

『国語辞典の世界』　金田一秀穂氏

日時　十二月一日（土）
　　十四時～十六時半
会場　北野市民センターホール

――請願書その後――

平成二四年第三回市議会にて、『小中学校に専任司書配置を求める請願』が提出されました。提出者は「八王子市の小中学校に学校司書の配置を求める連絡会」、本会会員の中田さんが代表です。今回は採択とならず、継続審議となりました。このことは、今後も行政として検討して報告をする義務が生じたということだそうです。

会員募集

正会員・・・本会のすべての活動に参加できます。入会金500円、年会費1000円です。

賛助会員・・・広報紙やイベントの情報をお届けします。本会の活動を支援してくださる個人、団体の方。年会費一口1000円です。

事務局だより

平成二十四年、八王子に学校図書館を育てる会は設立十周年を迎えました。目覚ましい成果ではなくても、確実に前に進んでいると実感できる道程ではありました。まだまだ道半ば、目標に向かい会員一同力を合わせたいと思います。

八王子に学校図書館を育てる会事務局
篠原（042-635-7756）